硬口蓋部に骨吸収を伴った停滞型粘液嚢胞の1例

佐藤文彦・角田典隆・鈴木慎太郎

A case of mucous retention cyst of the hard palate
with bone resorption

Fumihiko SATO・Noritaka TSUNODA・Shintaro SUZUKI

Abstract: We report and briefly discuss an atypical case of mucous retention cyst arising in the hard palate. The patient, a 21-year-old woman, had noticed swelling in the left side of the hard palate. The color of the lesion was dark red, resembling a hematoma or hemangioma. When we excised the lesion under general anesthesia, we found bone resorption of the hard palate. The clinical diagnosis was hemangioma because of clinical and operative findings, but the pathological diagnosis was mucous retention cyst.

Key words: mucous retention cyst (停滞型粘液嚢胞), hard palate (硬口蓋), bone resorption (骨吸収)

緒 言

硬口蓋部に発生する腫瘍性病変には、鼻口蓋管嚢胞や正中上顎嚢胞など顎骨内に発生する嚢胞や、菌性感染症による膿瘍、小唾液腺由来の病変などが挙げられる。そのなかで、口蓋部に存在する小唾液腺に由来した腺系腫瘍はときどきみられるが、下唇、口底などに好発するといわれている粘液嚢胞が口蓋部に発生した症例は少ない¹⁻³⁾。今回われわれは、口蓋部に発生し術前および術中所見でも血管腫と診断され、術後の病理診断の結果により停滞型粘液嚢胞と診断された症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：21歳、女性。

初 診：平成12年2月

主 訴：口蓋部腫脹。

既往歴、家族歴：特記事項なし。

現病歴：平成11年12月頃より硬口蓋部に暗赤色の血豆のような腫瘍に気付くも放置していた。しかし、その後も腫瘍が縮小傾向を示さないため、平成12年2月 に当科を受診した。

現 症：硬口蓋部正中のやや左側寄りに、13×11mmの大きさで暗赤色の境界明瞭な腫瘍を認めたが、疼痛の訴えはなかった。腫瘍は弾性軟で退色性はみられなかった。そ

の後も腫瘍の大きさの変化はなかった(写真1)。

画像所見：MR像では口蓋左側に10×10mm大で類円型の結節性病変を認めた。内部はT1強調像で高信号、T2強調像では皮下の脂肪よりも低信号であった。また、前額断では口蓋骨が半球状に吸収している像がみられた(写真2)。

臨床診断：血管腫の疑い。

処置および経過：平成12年3月、全身麻酔下に口蓋部の腫瘍を摘出した。軟組織部では安全域を2～3mmとり、電気メスにて口蓋粘膜を切開して正中側より剥離を開始したところ、腫瘍は被膜を有しており、境界は明瞭で剥離は容易であった。剥離後の口蓋骨には半球状の吸収が認められた(写真3)。さらに大口蓋孔付近では、索状物が腫瘍表面に密着しており、栄養血管の流入を疑わせる所見であったため、索状物が大口蓋孔より出た部分で結紮したのち、切断して腫瘍を摘出した。腫瘍摘出後、止血を確認したのちに、テルダーミスを創部の辺縁に縫合固定し、その上で軟膏ガーゼによるタイオーバーを行い手術を終了した。

術後5日目でタイオーバーを除去して、その後は経過観察とした。術後6か月では左側硬口蓋部に皿状の窪みがみられるが、健全な上皮で完全に覆われており、再発所見および自覚症状も認めず経過は良好である。

手術標本所見：摘出標本は暗赤色で表面を被膜で覆われた類円型を呈していた。大きさは13×10×8mmであった。

病理組織学的所見：弱拡大のヘマトキシリン・エオジン染色像では、口蓋側に重層扁平上皮とその内側に線維性結合組織が認められた。さらにその内側に1～2層の扁平上

豊川市民病院歯科口腔外科

(主任：鈴木慎太郎医長)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Toyokawa City Hospital (Chief: Dr. Shintaro Suzuki)

受付日：平成14年1月18日

写真1 初診時口腔内写真
左側硬口蓋部に暗赤色の腫瘍を認める。

写真3 術中写真
口蓋骨に半球状の骨吸収像を認める(矢印)。

写真2 MR画像(前額断)
A: T1強調画像, B: T2強調画像
左側口蓋部にT1強調画像で高信号, T2強調画像では脂肪より低信号を示す病変を認める。口蓋骨には半球状の骨吸収像もみられる(矢印)。

写真4 病理組織像(H-E染色, ×25)
嚢胞壁の内側には粘液の貯留に血球成分の混在が認められる(矢印)。

皮細胞または絨毛上皮細胞によって構成される嚢胞壁とそれに被覆された粘液の貯留がみられた。また、内容液中には血球成分が認められた(写真4)。

ムチカルミン染色では、1～2層の上皮細胞のところに粘液を含んだ大きな粘液産生細胞が認められた(写真5)。

病理組織学的診断：停滞型粘液嚢胞。

考 察

粘液嚢胞はその発生機序により溢出型と停滞型に分けられる⁴⁾。溢出型粘液嚢胞は導管の損傷により粘液成分が周囲組織内に流出、貯留することにより生ずる。そのため咬傷や食物による組織損傷を受けやすい部位である下唇、口底、舌、頬粘膜は粘液嚢胞の好発部位^{5, 6)}として十分に説

明ができる。一方、停滞型粘液嚢胞は導管の狭窄または閉鎖などにより唾液の流出障害が生じ、排泄管が拡張して嚢胞化するもの⁴⁾や、Oncocyte細胞を含む導管自体が嚢胞化するもの⁷⁾、導管のOncocyte様細胞や杯細胞による粘液物質の過剰な分泌により導管が拡張するために発生するもの⁸⁾が考えられている。したがって停滞型粘液嚢胞の病理像では嚢胞腔全体に上皮の被覆が認められる場合が多い⁹⁾。本症例でも嚢胞内腔を被覆する一層の上皮細胞が全体にみられ、そのところどころに粘液を含んだ粘液産生細胞

写真5 病理組織像

(ムチカルミン染色, ×100)

嚢胞の上皮細胞内に粘液産生細胞が認められる(矢印)。

胞が認められた。また、その粘液産生細胞の大きさがその他の細胞と比較して大きいことから、本症例における嚢胞の発生機序については、口蓋部に存在する小唾液腺の導管部粘液産生細胞が通常量以上の粘液を産生し、粘液の流出障害により導管部が嚢胞化したと推察される。

停滞型粘液嚢胞の好発部位は明らかでなく、口腔粘膜のどの部分にでも発生しうるものである。しかしその発生頻度は溢出型と比較して低く¹⁰⁾、口蓋部に発生した症例は過去の報告からもわずかである^{1~3)}。口蓋部小腫瘍病変には視診、触診によりその色や形態などの性状を参考にして術前診断を行い、全摘出標本の病理検査により確定診断をつけることが多い。本症例における術前診断は血管腫であり、手術時の所見でも摘出時にみられた口蓋骨の陥凹した吸収像、腫瘍に小血管が近接していたこと、腫瘍が暗紫色を呈したことにより血管腫としても矛盾しないと思われた。しかしながら病理診断は停滞型粘液嚢胞であり、臨床診断との違いがみられた。骨の吸収について考えると、硬口蓋後方部の粘膜は厚いためその内部で嚢胞が形成された場合、口蓋骨を圧迫する力は強くなり、それにより骨吸収が生じたと推察される。過去にも骨吸収の確認された報告はみら

れ¹¹⁾、そこでは嚢胞壁を構成する上皮にはある程度の増殖能を有していると考えられている¹²⁾。また、腫瘍が暗紫色を呈した理由については、発生部位が左側の大口蓋孔付近であり、粘液嚢胞が大口蓋動脈または小口蓋動脈からの分枝に近接していたため、食事の際の外傷などの原因により血管が損傷し、流出した少量の血液が嚢胞腔内に混入したと考えられる。今後、口蓋部の腫瘍性病変の臨床診断に際しては、粘液嚢胞のような嚢胞性疾患も鑑別疾患のひとつとして念頭に置く必要があると思われた。

結 語

われわれは、硬口蓋部に発生した骨吸収をともなった停滞型粘液嚢胞のまれな1例を報告した。

引 用 文 献

- 1) 下山哲夫, 堀江憲夫, 他: 硬口蓋に生じた停滞型粘液嚢胞の1例. 日大歯誌 70: 631-633 1996.
- 2) 山田博基, 加藤恵三, 他: 硬口蓋に発生した粘液嚢胞の1例(抄). 日口外誌 40: 347 1994.
- 3) 原 英之, 古田倫郎, 他: 口蓋に発生した粘液嚢胞の1例. 東北歯大誌 10: 137-140 1983.
- 4) 石川悟郎: 口腔病理学Ⅱ. 永末書店, 東京, 1982, 429-433頁.
- 5) 石田 恵: 口腔粘液嚢胞の臨床的ならびに組織学的研究. 口病誌 47: 447-464 1980.
- 6) 左 春喜, 篠原正徳, 他: 唾液腺粘液嚢胞の臨床統計的検索. 日口外誌 28: 1545-1550 1982.
- 7) Southam, J.C.: Retention mucocoeles of the oral mucosa. J Oral Pathol 3: 197-202 1974.
- 8) 小田島哲世, 奥山富三: 上口唇に発生し多彩な組織像を示した粘液嚢胞の一例. 口科誌 28: 333-337 1979.
- 9) 黒豆照雄: 口腔粘液嚢胞の臨床病理学的研究. 日口外誌 29: 393-403 1983.
- 10) Harrison, J.D.: Salivary mucocoeles. Oral Surg Oral Med Oral Pathol 39: 268-278 1975.
- 11) 佐々木文彦, 渡辺亮夫, 他: 骨吸収を伴った硬口蓋停滞型粘液嚢胞の1例(抄). 日口外誌 42: 1240 1996.
- 12) 大久保章朗, 松井竜太郎, 他: 硬口蓋に発生した貯留型粘液嚢胞の1例. 日口外誌 42: 1224-1226 1996.